

Task of Glocality Study: Geddes and Ward/Dubos

FUJIKAWA Satoshi

“Think Globally, Act Locally” is now a very popular phrase. Wikipedia on the internet tells that the original form of it: “Think Global, Act Local” has been attributed to Scots town planner and social activist Patrick Geddes.

Walter Stephen, who is the Chairman of the Sir Patrick Geddes Memorial Trust, edited an anthology *Think Global, Act Local* (2004) and says that Geddes coined the mantra in his *Cities in Evolution* (1915). But the word “global” does not appear in the book. Geddes insisted both needs of regional survey in town planning and careful application of comprehensive knowledge. His message was “Think Trans-local, Act Local.”

On the other hand, “spaceship earth” and “global village” are the key concepts of *Only One Earth* (1972) by Barbara Ward and René Dubos. Dubos is a French-born American microbiologist and environmentalist, and is also listed as one of the candidates of the first prophet of “Think Global, Act Local” in the environmental context. Their book ardently indicates the need of the global thinking, though, the authors contrasted it against the national interests. The contention of the book was “Think Global, Act Transnational.”

Historical survey of the environmentalism by John McCormick tells us that the rise of the global thinking goes back to *Man and Nature* (1864) by American diplomat and philologist George Perkins Marsh. Geddes admired the book as it “will long remain a classic.” OED registers that the first use of “global” in 1676 and that of “local” in 1485. The concept of “glocality” must be translatable to other languages, and the notion of it may go back to the rise of humanity. The true task of glocality study lies in the search of humanity in a glocal notion to comprehend it in a global context.

グローカリイティ研究の課題―ゲデイスとウォード&デュボス

藤川 哲

はじめに

- 一 ゲデイス『進化する都市』
 - 二 ウォード&デュボス『かけがえのない地球』
 - 三 リオ・サミットと環境主義の思想史
- おわりに

はじめに

「シンク・グローバルイ、アクト・ローカリイ (Think Globally, Act Locally)」という成句は、「地球規模で考え、地域で行動する」と訳されて、一九八七年頃から日本でも知られている。^①英語版ウィキペディアによれば、この成句には「Think Global, Act Local」という、より短いもののかたちがあり、そのものになった言葉はスコットランド人の都市計画家で社会活動家のパトリック・ゲデイス

スに帰属されてきたとされる。^②二〇〇四年にゲデイスの生誕百五十周年を記念して刊行された論文集の表題が、まさに「Think Global, Act Local」であった。編著者のパトリック・ゲデイス卿記念財団理事長ワルター・ステファンは「Think Global, Act Local」を発案したのはゲデイスであると述べ、その典拠に彼の代表的著作である『進化する都市』(一九一五年)を挙げる。^③だが、ウィキペディアにも続けて説明されている通り、同書の中に、この文を見出すことはできない。同書の全文はデジタル化されて「オープン・ライブラリー (<http://openlibrary.org>)」に公開されており、キーワード検索によって「Global」という単語が登場しないことが容易に確認できる。^④

他方、ゲデイスが一九八八年に発表した論文「社会発展に対する地理的条件の影響」には、米国の自然学者ジョージ・パーキンス・マーシュの『人間と自然』(一八六四年)への言及があり、ゲデイスは同書を「長く残

る古典」と高く評価している^⑤。米国の環境思想家ロデリック・ナッシュの評によれば、マーシュの『人間と自然』は、人間が自然に与える影響を「地球環境の保全」という観点から制限する視点を打出した環境思想上の先駆的著作であるから、ゲデイスが『進化する都市』を刊行する以前に「地球規模で考える」視点を獲得していたと推測することは可能であろう。またゲデイスは、一九〇〇年のパリ万博において巨大な地球儀 (Grand Globe) を展示するために尽力している。発案者のフランス人地理学者エリゼ・ルクリュとともに、ゲデイスが巨大な地球儀の展示を世界の人々とその叡智を結びつける象徴的な神殿として捉えていたという建築史家フォルカー・ウェルターの指摘も、一九一五年の著作刊行以前に「地球規模で考える」視点が獲得されていたと考える傍証になるだろう。^⑦『進化する都市』に「Think Global, Act Local」の文言そのものが登場しなくとも、その思想が読み取られると主張するか否かは、論者次第となってくる。

ところで近年、グローバリゼーションをめぐる議論を掘り下げて「グローカリゼーション (glocalization)」という造語が用いられることがある。「グローバル (global)」と「ローカル (local)」を合成した「グローカル (glocal)」という形容詞から生成される動詞「glocalize」を名詞化

した単語で、社会学者ローランド・ロバートソンが一九九二年の学会発表で使用したのが初出とされる^⑧。文化研究の領域でこのグローカリゼーションという概念に着目した日本の社会学者大谷裕文に拠れば、ロバートソンがこの造語を使用する以前に、イギリスの文化研究者スチュワート・ホールが一九八一年に発表した「右旋回」という論文にすでに、グローバルな事象とローカルな事象が分かちがたく連動して進行しているという認識は示されていたという^⑨。ロバートソンや大谷が論究するグローカリゼーションは、グローバリゼーションの実態をより正確に見極めるための参照枠であり、その視線は「グローバル化 (globalize)」と「ローカル化 (localize)」の一体的進行という現象面に注がれている。「Think Global, Act Local」という四つの単語からなる成句と、そのうちの二つの形容詞から派生した「glocalization」では、それぞれが含意する内容に互いに重なり合う部分とまったく重なり合わない独自の領域があると考えられる。本論では、この重なり合う部分を「グローカリティ (glocality)」と呼びたい。

グローカリゼーションにせよ、グローカリティにせよ、欧米語の音素と品詞の組成規則から半ば自動的に生成される造語である。日本語を用いて論じていくことに上滑

りな展開を予感しなくもない。「Think Global, Act Local」の逐語訳は冒頭に紹介した「地球規模で考え、地域で行動する」であるが、稿者はこの成句の意識として「天地人」を充てたい。「Think Global」は「天」に相当し、「Act Local」は「地」に相当する。「Think」も「Act」も命令法であるから、省略された主語として「人」が前提されていると考えよう。「天」は手に届かないがゆえに思考の領域に属し、地は私たちが拠って立つ基盤であり実践の対象である。社会や文化の現象面を論ずる「グローバルゼーション」と、自らの行動の指針であり、他者への呼びかけともなる「Think Global, Act Local」には「人」の扱い方を分水嶺としてそれぞれに異なる領域が開かれる。裏を返せば、二つの領域が重なり合う部分としてのグローバルシティが「人」である。グローバルシティとは私たち一人一人が体現する領域であると言える。

このグローバルシティを体現する存在としての「人」を説明するため、「Think Global, Act Local」という成句の前半部分「Think Global」に着目して、異なる時代に書かれた二つの著作を比較対照することが本稿のねらいである。構成は以下の通りである。まず一九一五年に刊行されたゲデイスの『進化する都市』を取り上げ、ゲデイスが「Think Global」の部分について、その有用性を認

めると同時に危険性に注意を喚起していた点を確認する（第一節）。次に一九七二年に刊行されたバーバラ・ウォードとルネ・デュボスの『かけがえのない地球』を取り上げ、「Think Global」の部分が地球社会の構築と全地球的規模の共同作業としてより具体的に議論されている様子を確認する（第二節）。そして環境主義の思想史に照らして二つの著作を位置づけ（第三節）、最後にグローバルシティ研究の課題を示す。

一 ゲデイス『進化する都市』

英語版ウィキペディアの「Think Global, Act Local」の解説は、ゲデイスの『進化する都市』に「Think Global, Act Local」の成句が出てこない代わりに、次の文章にその思想が読み取られるとしている（以下、西村一郎訳を参照しつつ、適宜原文の表現を補う）。

「このように「地方性」とは、その模倣者が考えたたり言ったりしているような、偶然古い世界に残っている奇妙で風変わりな事柄を指すのではない。それはすべての環境の適切な把握と取扱いの過程を通じ、かつ問題にされている場所の本質的で個性的な生活についての積

極的な共感を通じてのみ、十分に理解されるものである。¹⁰⁾

ゲデイスは真の「地方性」[local character]がいかなるものであるかを説明してはいる。しかし、右の文章のみから、それを「地球規模で考える」ことと関連づける視点を打ち出しているとは言い難い。引用部分を含む段落は、真の都市計画が地方の個性の表現でなければならぬことを説き、それを実現するために都市計画家が十分な調査を実施する必要があることを主張している箇所である。

同段落の前に置かれた三つの段落で、真の都市計画が必要とされる理由として、憂うべき現状が語られている。それは、真の都市計画にとつての「新たな危険」であり、「新たな障害」の登場である。計画を誤った方向へと導くために「新たな危険」と呼ばれ、出来上がったものがその修正に時間を要するために「新たな障害」と呼ばれているのである。¹¹⁾

ゲデイスが警鐘を鳴らしたのは、「模倣」が孕む危険と障害であった。ゲデイスは「旅行」を抽象的議論より有益であると評価する。国内や外国への視察旅行によって得られた経験や知見が蓄積され、「博覧会」等を通じ

て人々に共有されることについては肯定的である。しかし、三つ目の段落でゲデイスはそれらが「包括的なもの」として現われ「comprehensively appear」と論じている。¹²⁾

過去の伝統や現代の先進的な例から学ばれた包括的なものが、「われわれ自身の住んでいる場所や時代や生活習慣からかけ離れてしまう」危険に注意を向けるのである。模倣の結果生み出された「既存の都市ショーのごたませ」や「無性格な眺望」という批判は、現代の都市計画の問題点にも通じている。¹³⁾ ここで述べられている「包括的なもの」は「地球規模で考える」ことと同一とは言えないが、「地方性」と対比される図式にはなっている。この箇所でのゲデイスの主張を「地球規模で考え、地域で行動する」の成句に倣ってまとめ直せば、「包括的な知識のもとで、その危険性に留意しながら、地域を十分に調査して都市計画を行え」となるだろう。

ゲデイスは同じ著作の別の箇所で、教訓の有益性と模倣の危険性をめぐる考えを、より端的に次のように表現している。

「ドイツから学べ、だつて。もちろん、その通り。ドイツをまねろ、だつて。それはちがう。」¹⁴⁾

ここでのゲデイスも「地球規模で考えよ」とは呼びかけていない。「先進地域に学べ、但し模倣には意味が無い」と述べているのみである。また、そうした先進地域から得られるのは「教訓」だけである、という裏返し表現も確認される。

「われわれを救うのはドイツでもベルリンでもパリでもない。レッチワースやハムプステッドでもない。それらには教訓を与えることが出来るけれども。」¹⁵

以上のように、ゲデイスの中で包括的な知識の有用性と、先進都市の計画をそのまま模倣することの危険性ははっきりと区別されていた。そして、そうした知見を適用する際に必須の手続きとして、ゲデイスは「地域調査 regional survey」を重視したのである。¹⁶

「Think Global, Act Local」という成句の意味に関して『進化する都市』に読み取ることが出来る考えは、「Local」を超えた領域を視野に収めて「Act Local」することの重要性に留まると稿者は考える。つまり意味の領域を図式化するならば後半部分を中心としたやや小さめの円になるだろう。それは「Think Global, Act Local」が描く意味領域の核心部分では見事に重なり合っているとは言え

る。ただし、そのすべてを覆っているわけではない。

ゲデイスは地域調査を補完するものとして、「関係する様々な諸都市と州地域の田舎と都会のすべての代表者間で、友好的協議会をすみやかに頻繁にもつべきである」と提案している。¹⁷ その理由として「給水と衛生のどちらを選ぶかというように、何がさらに明らかに広域な地域の仕事であり、何が地域内の仕事であるかなどと、もはや別々にうまく処理することができないのである。」と述べている。¹⁸ ここにはグローバルな事象とローカルな事象の一体的進行とは言えないまでも、ローカルを超えた、より広域で進行している事象とローカルな地域内で進行している事象とが分かちがたく連動しているという認識が示されている。ホールの論文から六十六年遡るゲデイスの指摘を、グローカリゼーションをめぐる議論の「萌芽」の一つと考えておくことができるだろう。

二 ウォード&デュボス『かけがえない地球』

ゲデイスが提案した「関係する諸都市と地域の代表者による友好的協議会」に相当し、ゲデイスの没後に設置されたのが国際連合の諸機関である。ゲデイスが世を去ったのが一九三二年四月。国連の発足は第二次大戦終

結後の一九四五年十月である。

バーバラ・ウオードとルネ・デュボスの共著『かけがえない地球』は、一九七二年六月にストックホルムで開催された国連の人間環境会議に向けた報告書として作成され、同会議に「考え方の枠組み」を提供することを期待されていた。デュボスもまた、英語版ウィキペディアの「Think Global, Act Local」の解説において、この成句を環境運動の文脈で最初に用いた人物の一人として名前が挙げられている。²⁰しかし『かけがえない地球』にも「Think Global, Act Local」は登場しない。にもかかわらず、デュボスがこの成句の最初期の使用者として紹介される際には、同書の中に登場すると説明されるのである。²¹ゲデイスの場合もデュボスの場合もそれぞれの全著作を精査すれば、「Think Global, Act Local」の成句が見出されるかも知れないし、そうでないかも知れない。そうした探索は全文検索が可能になる未来に先送りする方が賢明だろう。すでにゲデイスの時代にグローカーリゼーションに対する認識の「萌芽」が認められるのであるから、現在の課題はその思想がどのように変容・深化しているかを検討することである。その検討には代表的著作である『かけがえない地球』がむしろ相応しいと言える（以下、曾田長宗ほか監修による邦訳を参照しつつ、

適宜原文の表現を補う）。

同書によって広く知られるようになった言葉が「宇宙船地球号 (spaceship earth)」である。国連大使アンドレイ・ステイーブソンが一九六五年七月九日にジュネーヴで開催された経済社会理事會に先立つ演説で「地球とは… (中略) …小さな宇宙船 (little spaceship) である」と述べた、と紹介されている。²²その後、七二年の『かけがえない地球』刊行までに、アポロ十一号の月面着陸（六九年七月）という人類史上初の偉業が達成される。アポロ十一号から撮影された惑星地球のカラー写真が、同書の巻頭を飾っている。

『かけがえない地球』には「global」に加えて「world-wide」という形容詞が登場し、いずれも「全世界的規模で」と訳されている。

「専門家の間には、環境問題が全世界的規模で増大してきており (becoming increasingly world-wide)、この解決のために全世界的規模でのアプローチが必要である (demand a global approach) とする点では、意見の一致が見られる。」²³（傍点筆者）

また「地球社会 (global village)」²⁴「地球全体の

規模で (planetary scale)」「地球全体の相互連関性 (interdependence of the entire cosmos)」など、「global」以外にも「planetary」や「cosmos」などの類義語の使用が見られる。同書の現状認識が端的に示されている文章を見てみよう。

「われわれは、古くからの民族単位の利益に固執し、国家ごとの権利を主張し、国際的権威の拡大を嫌う習性を持っているため、地球全体の環境に対して全人類が協力して積極的に対策を推進すべき必要 (the whole field of planetary necessities) を認識することが困難である。しかし現段階での人類は、限定的で特殊で根本的には自己主義的発想にもとづいたものであるにしても、少なくとも地球全体の規模 (the global point of view) で環境問題の解決に当たる必要に迫られている。たとえば、地球の気象上 (in the planetary weather system) の偶発的で潜在的に大きな被害を及ぼす変化に対しては、全人類が国際的レベル (at the global level) の協力体制で当たらない限りはその解決が不可能である。すでに国家レベルの主権を主張している余裕はない。さらに、人類が長い間自然のごみ処理場として使用してきた各国にまたがる巨大な海洋

(global ocean system) に対しても、国家ごとの対策で全く対処できない段階にさしかかっている。」(傍点稿者)

右の引用に見られる通り、同書は地球規模での環境保全の取り組みがこれまで十分に着手されてこなかったことへの反省を促し、待ったなしで取り組むべき課題であることを主張している。つまり、「Think Global, Act Local」の前半部分すなわち「Think Global」が環境問題への取り組みにおいて、いよいよ吃緊の課題となったことを告げているのである。

では、後半部分の「Act Local」については、どのような見解が述べられているであろうか。この成句に最も近い考えを表明している箇所では、同書の著者たちが「Think Global」に対して従属的で控え目な役割しか与えないことが読み取られる。

「地球の相互依存関係を人類が真に理解するためには、それを全世界的規模で考える (seen to be world-wide) と同時に、各国の利益をも十分に配慮すべき (supported with as rational a concept of self-interest) である。」(26)

同書の主たる論調は、全人類の利益を国家の利益に優先させ、地球規模の観点から方向付けて行く構成になっている。「地球全体 (global)」に対して「地域 (local)」を対比させるのではなく、「国家 (nation)」を対比させた図式が、『かけがえのない地球』の思考の枠組みなのである。²⁹⁾

三 リオ・サミットと環境主義の思想史

では、「地球全体 (global)」と「地域 (local)」を対比させる枠組みを提示したのは、いったい誰であろうか。『オックスフォード英語辞典 (OED)』によれば、「global」の最も早い使用例は一六七六年のものであり、「local」のそれは一四八五年である。³⁰⁾ 両者を組み合わせた使用例が一六七六年より遡ることはないだろうが、グローバルな事象とローカルな事象とが分かちがたく結びついているというグローバルゼーションの観点から、この二つの単語を対比しつつ使用した最初の人物を特定するには、今しばらくの時間が必要と思われる。「Think Global, Act Local」という成句を最初に用いた人物や、「global」と「local」を対比させて考察した最初の著作の特定には時間が要るが、「Think Global, Act Local」が広く知られる

ようになったきっかけの一つが一九九二年開催の地球サミットである、という見方はゲディス卿記念財団のワルター・ステファンが紹介している通りであつて、異論を挟む余地はないように思われる。³¹⁾

地球サミットは、国連の主催によりリオ・デ・ジャネイロで開催された国際会議で、「環境と開発に関する国際連合会議」とも「リオ・サミット」とも称される。国連では、七二年にストックホルムで開催した人間環境会議を皮切りに、八二年のナイロビ会議、九二年のリオ・サミット、二〇〇二年のヨハネスブルグ・サミットと、十年おきに環境問題について話し合う国際会議を開催している (二〇一二年には再びリオ・デ・ジャネイロでの「リオ十二」開催が予定されている)。リオ・サミットで合意された行動計画「アジェンダ二十一」の「第二十八章 アジェンダ二十一の支持における地方自治体のイニシアティブ」は、地方自治体の主体的な活動の必要性を明言し、各自治体に独自の「ローカル・アジェンダ二十一 (Local Agenda 21)」の策定を求めている。³²⁾ ローカル・アジェンダは「地域で行動する」ための指針であり、地球サミットのアジェンダと連動するかたちで構想される点において、まさに「Think Global, Act Local」を体現するものである。

ステファンは、一九七〇年代と九〇年代における環境主義に対する人々の意識の高まりと、ゲデイス再評価の気運の盛り上がりを重ね合わせて、両者の関係を「偶然の一致ではない」と説明している。³³ その当否はともかく、七二年のストックホルム会議や九二年のリオ・サミットに結実していく環境主義の思潮が、「Think Global, Act Local」という成句に具体性のある文脈を提供する背景となってきたことは確認しておくべきだろう。

環境主義(Environmentalism)とは、『地球環境運動全史』をまとめた米国の政治学者ジョン・マコーミックに拠れば、「人間の要求と自然環境の限界を認めて、両者の妥協点をさぐる価値観、態度、政策をひろめること」³⁴である。マコーミックがまとめた環境主義の歴史を紐解き、ゲデイスやウォード&デュボスの著作が登場する時代の前史を検討しておく必要がある。ゲデイスに「地球規模で考える」視点を提供したと考えられるマーシユの『人間と自然』のように、先行する著作や制度によらずで到達されていた地点との「差分」を明らかにすることができて初めて、『進化する都市』や『かけがえない地球』の先駆的な役割がどの辺りにあるかを特定できるからである。

イギリスの環境主義の起源を考察する中で最初に挙げ

られる著作が、ギルバート・ホワイトの『セルボーン博物誌』(一七八九年)³⁵である。同書は鳥や昆虫、植物などの生態や自然景観の観察を、ロンドン近郊の小村セルボーンセルボーンの歴史や風土とともに記録した点で、当時の標本主義的な博物誌と一線を画していたとされる。また、マコーミックに拠れば、ホワイトは「人間が自然と平和共存するためには質素さと謙虚さが必要」と説いており、後代の博物学者たちに大きな影響を与えたという。マコーミックはこの博物学上の偉業を「最初の転機」と位置づけている。十九世紀に入って、イギリスにおける環境主義は博物マニアによる標本収集の過熱と狩猟ブームによる乱獲を背景に、一八二四年の動物保護協会設立へと展開する。³⁶これが「第二の転機」である。動物保護の精神に続いて、五三年の煙害阻止法成立に見られるように、都市の環境汚染の問題が意識されるようになった。³⁷これが「第三の転機」である。ゲデイスがスコットランドのパラターパラターで生まれたのは、この法案成立の翌年、一八五四年十月である。

ゲデイスがまだ少年であった一八六〇年代に、マコーミックは「第四の転機」を訪れたとする。汚染された産業都市への嫌悪感を背景とした、自然に囲まれた田園生活に対する人々の憧れが強まって、自然との触れ合いに

憩いや安らぎを見出す「アメニティ運動」の興隆である。一八六五年の「共有地・田園・遊歩道保存協会」の設立が、その最初の成果とされる。³⁸この第四の転機に、二番目の転機である自然保護運動と三番目の転機である都市環境の整備運動との結合を見ることが出来る。フォルカー・ウエルターによって「バイオポリス」と評されるゲデイスの環境主義的な都市計画もまた、こうした一八六〇年代以降の環境思想上に位置づけられる。

環境主義の歴史には登場しないが、ゲデイスの思想に大きな影響を与えたと言われるのが、ダーウィンの『種の起源』（一八五九年）とフランスの社会学者フレデリック・ル・プレーの「場所、仕事、家族 (lieu, travail, famille)」を三要素とする社会理論である。前者には、一八七五年冬頃、ゲデイスがロンドンでダーウィンの熱心な信奉者であったトマス・ヘンリー・ハクスリーの下で動物学を学んだ折に、後者には、七八年から七九年にかけてパリのソルボンヌ大学とエコール・ドゥ・メディサン（医学校）で生物学や生物組織学を学んだ頃に接したとされる。「適者生存」や「自然淘汰」という言葉に代表されるダーウィンの進化論も、三つの要素の相互作用から社会の多様性を説明するル・プレーの社会理論も、大括りに見れば、生物や人間がその環境との相互作用に

よって進化発展していくという理論である。そして、右に見たように風土とそこに生きる生物とを結びつける視点は十八世紀の博物学者ホワイトの著作にすでに示されていた。生物と環境との相互作用に着目する視点を『セルボーンの博物誌』の達成に帰するならば、グローカリティの原点の一つもまたホワイトが説いた「質素さと謙虚さ」に置くことが可能だろう。

右に見てきた通り「Think Global, Act Local」に関するゲデイスの到達点は、もはやグローカリゼーションをめぐる議論の「萌芽」とも、マーシュの『人間と自然』によって示されていた「Think Global」の部分とも言い難く、その差分である「Act Local」の部分へと大きく比重が移る。『進化する都市』が強調していたのは地域調査の重要性であり、包括的知識の無批判な適用の危険性であった。また同書の中でゲデイスが語っている「Think Global」に相当する部分は、厳密には「超地域 (trans-local)」であった。地域の問題解決のために「超地域」を視野に収めなければならないと主張していたのである。すなわち、「進化する都市」に表わされていたのは、「Act Local」を主とし、「Trans-local」を従として活用する考え方であった。

引き続き環境主義の歴史について、今度は『かけがえ

のない地球』の前史に焦点を絞って検討したい。一九七二年に開催されたストックホルムの国連人間環境会議に先立つ試みとして、米国のセオドア・ルーズベルト大統領下で構想された一九〇九年の世界環境会議が挙げられる。同年二月、米国、カナダ、ニューファウンドランド、メキシコが参加し、ワシントンで開催された北米自然保全会議において「自然保全は一国の国境を越えた広域の問題である」という合意がなされた点が画期的である⁴⁰。ルーズベルトは、同会議の開催期間中にハーグでの世界会議の開催を決め、五十八カ国に招待状を送ったが、この事業は三月に交替した後任のウィリアム・タフト大統領によって中止され、実現しなかった。また同年、パリで欧州の自然保護活動家による国際自然保護会議が実現し、国際的な自然保護機関の創設が提案された⁴¹。これを受けて一三年に欧州十七カ国の署名による国際自然保護諮問委員会が設置されたが、翌年の第一次大戦の勃発で国際会議の開催は見送られ、その実現は第二次大戦後、国際連合の活動開始まで持ち越される。この間、米国で次の五つの著作が刊行された。生態学者ポール・シアーズの『砂漠の進行』（一九三五年）、フランク・ピアソンとフロイド・ハーパーの共著『世界の飢餓』（一九四五年）、ヘンリー・フェアフィールド・オズボーン・ジュニアの

『私たちの略奪された惑星』（一九四八年）と『地球の限界』（一九五三年）、そしてウィリアム・ヴォークトの『生き残る道』である⁴²。これらの著作は広く読まれたが、彼らが鳴らした警鐘は戦後の繁栄を謳歌する米国民の生活様式を変えるには至らず、同国の大量消費社会化はむしろ加速した。マコーミックの表現を借りれば、「耳を貸すようになったのは、さらに時間がたつてから」であった⁴³。

「環境革命」とマコーミックが評する時代が、一九六〇年代に訪れる。そのきっかけとなったのがレイチェル・カーソンの『沈黙の春』（一九六二年）であった。カーソンは、殺虫剤として広く使用されていたDDTを始めとする化学物質が、自然界では分解されにくく、「全人類の環境を持続的に毒している」と告発した⁴⁴。同書は、単にベスト・セラーとなつて議論を巻き起こしたに留まらず、環境に対する一般大衆の問題意識を自覚めさせた⁴⁵と評されている。化学物質による環境汚染に対する問題意識の高まりと並行して、五〇年代から六〇年代には、核実験による放射能汚染に対する問題意識も高まった。その成果の一つが、一九六三年八月の部分的核実験禁止条約の締結である⁴⁶。その後、史上最大の環境デモと評される一九七〇年四月の「アース・デイ」⁴⁷、人類

の成長が百年以内に限界に達すると警告したローマ・クラブの『成長の限界』（一九七二年）を経て、ストックホルムの人間環境会議（一九七二年六月五～十六日）が実現する。この会議のためにまとめられた『かけがえのない地球』は、大気汚染、水質汚染、殺虫剤の問題、廃棄物の問題、人口と食糧の問題、原子力の問題、先進国と発展途上国の問題等が紹介され、「地球の調和」と「生存のための戦略」の議論で締めくくられる。

右に見てきた通り『かけがえのない地球』の到達点もまた、惑星地球というグローバルティを最初に示したものと評しがたい。人類の月面着陸達成以前と以後とで「惑星地球」をめぐる認識に大きな前進があったことは事実としてもよい。だが、一九四八年の『私たちの略奪された惑星』等によって、そうした意識が先取りされていたことも事実である。その差分としての『かけがえのない地球』の歴史的意義は、最初の国連主催による環境会議の思考の枠組みであったという点に尽きる。換言すれば、環境問題に関する「Think Global」の制度化と定例化の第一歩を記す、多方面にわたる問題の集積であり、今後も繰り返し参照され、現在地を確認するための出発点ということになる。九二年のリオ・サミットの「ローカル・アジェンダ二十一」に具現す

る「Think Global, Act Local」は、地球規模の環境保全の観点に立って国家の利益を抑制し、国際協調の必要性を訴えるところから始まった。つまり同書の中で語られている「Act Local」に相当する部分は、厳密には「超国家(transnational)」であった。すなわち、『かけがえのない地球』に表わされていたのは「Think Global」を重視して、「Act national」を「Act Transnational」に改めることの必要性であった。

おわりに

以上、ゲデイスの『進化する都市』（一九一五年）とウオード&デュボスの『かけがえのない地球』（一九七二年）の内容を吟味し、両者の環境主義の思想史における位置づけを検討した。そのねらいは「Think Global, Act Local」の前半部分「Think Global」に着目しつつ、グローバルティを体現する存在としての「人」について説明することであった。

まずグローバルティについて振り返っておくと、「local」の最も早い使用例は一四八五年であるが、「global」の初出が一六七六年であるから、「global」と「local」を対概念のように使用する著者や著作が現われるのは、一

六七六年以降と推定される。イギリスの環境主義の思想史に目を移せば、風土とそこに生きる生物とを結びつける視点が一七八九年のギルバート・ホワイト『セルボーン博物館』に表わされており、それ以前の博物学から一線を画すと評される。自然と共生するためにホワイトが人間に求めた「質素さと謙虚さ」は、グローカリティの原点の一つの暫定候補である。その約百年後、一八六四年に、ジョージ・パークィンス・マーシュの『人間と自然』が、人間が自然に与える影響を「地球環境の保全」という観点から制限する視点を打出した。一九一五年に刊行されたパトリック・ゲデイスの『進化する都市』は、地域の問題を解決するために「超地域 (trans-local)」的な思考の枠組みを重視しつつも、その無批判な適用の危険性に注意を喚起し、地域調査の重要性を訴えた。同書の中に「Think Global, Act Local」という文言は登場しないが、その主張は「Think Trans-local, Act Local」と読める。ゲデイスが地域調査を補完するものとしてその必要性を訴えていた「友好的協議会」は、環境主義に関しては一九〇九年よりその試みが見られるが、国際会議として実現するのは一九七二年の国連人間環境会議まで待たねばならなかった。同会議に思考の枠組みを提供した『かけがえない地球』が刊行されるまでに、一九四八

年のヘンリー・フェアフィールド・オズボーン・ジュニア『私たちの略奪された惑星』や一九六二年のレイチェル・カーソン『沈黙の春』等の刊行によって環境主義に対する人々の意識は高まっており、また一九六五年の国連大使アンドレイ・ステイーブンソンによる「宇宙船地球号」発言や、一九六九年のアポロ十一号による月面着陸や大気圏外から撮影された地球の視覚的イメージ等を通じて「惑星地球」に対する意識もゲデイスの時代と比べて大きく前進していた。『かけがえない地球』の中にも「Think Global, Act Local」という成句は登場しないが、同書は環境汚染のみならず、食糧危機やエネルギー危機、核実験や原子力発電に付随する放射能汚染の脅威等を背景に、敢えて成句化すれば「Think Global, Act Transnational」と訴えていると読める。以上のように本稿では「Think Global, Act Local」の初出について、冒頭に述べた「Think Globally, Act Locally」の訳としてすでに一九八七年には日本でも知られていたということ以上の情報を追加しないが、その精神が一九九二年のリオ・サミットにおける「ローカル・アジェンダ二十一」に具現し、この頃から人々によく知られるようになったとするゲデイス卿記念財団のワルター・ステファンの考えを支持するものである。

次に「人」について掘り下げよう。まずパトリック・ゲデイスについて、ワルター・ステファンが的確な評言を与えていると思われる。「Think Global, Act Local」の成句をインターネットの検索サイトに入力すると十八万五千件のヒットが得られることを紹介したのち、以下のように述べている。

「これほどに短くて単純な、ほとんど自明の理とさえ言える成句が世界中で響き合い、反響を繰り返す力を持つているという事実に着目すべきである。全地球的思考と地域的活動 (Global thinking and local action) について語り合っている人々とはいったいどのような人々であろうか。そしてまたそうした人々は実際にどのように活動しているのだろうか。」⁴⁹⁾

反語的な表現になっているため直接名指されてはいないが、ステファンがここに込めた意味は、現代の多くの人々が「地球規模で考え、地域で行動する」という言葉を口にするわりに、そのようには活動しておらず、ゲデイスこそがそれを百年先取りした先駆者であった、ということになるだろう。『進化する都市』に読み取られる主張が、あくまでも「Act Local」の部分に比重を置いてい

るという点は、すでに確認した通りである。グローカリティを「人」の問題として捉え直した際には、グローバルな視野を持つことと同時に、それ以上に、実際にその知識を活用して地域の状況を改善・発展させることが重要であると考えられる。

また『かけがえない地球』については、序文に次の文が見られる。

「この『かけがえない地球』の執筆にあたった国際的作業グループに属する仲間の一人は、この本以外にも同時に本を執筆していたが、かれはその本の中で、各地域ごと、各社会ごと、各個人ごとの個有の開発、発展、いかえれば個性の開拓の重要性を強調している。この二つは決して両立不可能なものではなく、むしろ相互補完的な努力である。」⁵⁰⁾

右の箇所は、原文では「one of us René Dubos」とデュボスの名が読み取られる⁵¹⁾。同時に執筆された著作は『内なる神』である⁵²⁾。その「第一章 世界の中の世界」には、「普遍性よりも特殊性、類似よりも差異を強調したい」、「なるほど地球を全地球的^{グローバル}にみようと見る見方は、全体としての世界の問題を研究する学者にとっては必要欠く

べからざるものであり、国際線ジェット機関係者のうちの一部の人びとにとっては便利なものであろう。しかし、私たちの大多数にとつては、これはほとんど意味をもたないことであつて、私たちの毎日の生活を占めているのは、結局は、局地的な限られた問題であり、あるいは、その日一日をどう生きのびるかという具体的な問題である。⁽⁵⁴⁾ という、『かけがえない地球』とは一見、相反するような主張も見られる。デュボスが同書の表題とした「内なる神」は、ギリシャ語の「*enheos*」を念頭に置いたもので、デュボス自身によつて「人間のかくれた側面、とりわけ、目を見張るような行爲を行うようにその人を動機づける力」と解説されている。⁽⁵⁵⁾ ここでもデュボスによつて主張されているのは、全地球的に考えることを補完する個人の主体的な行動力の重要性である。さらに、同書が国家主義ナショナリズムと地域主義リジョナリズムを混同しないように注意を促し、「場所の精神」に敬意を払うことを訴えている点も見逃せない。

「物質的にも方法的にも国際的な様式というものが生まれて、このおかげである種の活動が全地球的に共通になったことは明白であるが、しかし他方、人間はその環境に際だつた特殊性を求めらるものである。地域

主義が存続する正当な根拠は、それぞれの場所のもつ宇宙的・地球的・歴史的な諸特徴のなかにある。環境的多様性が、もともと人間と自然双方の性質に根ざすものである限り、それは〈ひとつの世界〉という政治的主張のなかでも生きつづけることだろう。自然的・文化的な諸影響力は、技術的・政治的命題を克服するであらうし、また場所の永續性の原動力となる「場所の精神」(*genius loci*)を育みつづけるだろう。⁽⁵⁷⁾

『かけがえない地球』に読み取られる主張が、「Think Global」に比重を置いていた点もまた、本稿で確認した通りである。そして共著者の一人デュボスについては、右に見た通り、個人の内的な動機と地域性に深く根ざした活動を重視していたことが読み取られる。『内なる神』にも「Think Global, Act Local」は登場しない。それぞれ著作から読み取られる「人」としてのデュボスとゲディスは、精神的な兄弟のように感じられる。そして私たちにもまた、実践の積み重ねを通じてグローバルシティの思想を体現せよ、と語りかけているように思われる。グローバルシティを体現する存在としての「人」とは、その実践者の活動の軌跡の位相に現われる、と結論される。

最後に、グローバルシティ研究の課題についてまとめる。

「Think Global, Act Local」の初出を検証する試みは継続を要するが、グローカリティ研究の真の課題は、英単語としての「glocality」や、英語文献において「global」と「local」が不可分かつ対の概念として議論されてきた歴史を検証することではない。一九九二年にローランド・ロバートソンが初めて「glocalization」という単語を使用したという事実は、一つの参照点として重要であるが、グローカリゼーションやグローカリティという言葉が指し示す概念は、別の言語に置き換えることが可能でなければならないし、人類の思想史との対話が可能でなければならない。ステファンが指摘するように「Think Global, Act Local」とは「ほとんど自明の理(almost a truism)」であって、グローカリティをめぐる探究は、その最大限長大な射程においては人が「全世界」を表わすなんらかの概念を持った時点でまで遡ることになるだろう。

も都市計画や環境主義の思潮に収まるものではない。哲学、倫理学、宗教学、芸術学、政治学、経済学、社会学等、およそ人間の社会的活動に関わるあらゆる領域において、この観点がいかに深められ発展してきたかが検証されなければならない。本稿が一つの到達点を認めるリオ・サミットのような国際環境会議における「Think Global」は、「天」と比較してみれば、「規制の枠組み」としての側面が強く意識される。環境主義の文脈で「地球規模で考える」ことは「限られた地球資源に配慮する」ことを意味する。環境主義の文脈から離れて「地球規模で考え、地域で行動する」という成句の意味するところを再考すれば、ゲデイスが示したように「地域の問題を解決するために、地域の枠組みを超えて思考する」という行動原理に帰着するだろう。このように考えてみれば、「Think Global, Act Local」が含意するグローカリティは、古代インドのリグ・ヴェエダに歌われる「幸多き賢慮は、いたるところよりわれらに來たれ⁵⁶⁾」という願いにさえ相通じる。本稿では、グローカリティの暫定的な原点の一つとして、ギルバート・ホワイトによって提示された「質素さと謙虚さ」を確認したが、今一つの原点を指し示す補助線を引くならば「智の無限の可能性」になるだろう。以上のように、具体的事例の考察からいくつかの原点

と補助線とを導きだし、それらの思想史的検証を通して、さらに深いグローカリティの理解に努めていくことが、グローカリティ研究の真の課題である。

註

- (1) チャドウィック・F・アルジャー『地域からの国際化―国家関係論を超えて』（日本評論社、一九八七年）、六三頁。なお、「地球規模で考え、地域で行動する」と題された同書第三章の英語原論文は一九八五年六月の発表とされる。
- (2) “Think Global, Act Local,” in *Wikipedia* <http://en.wikipedia.org/wiki/Think_Globally,_Act_Locally>. (2011/7/26) 該市簡所の記述と関連する註は、’Origin in Town Planning: The original phrase “Think Global, Act Local” has been attributed to Scots town planner and social activist Patrick Geddes. [1] Although the exact phrase does not appear in Geddes’ 1915 book “Cities in Evolution,” [2] the idea (as applied to city planning) is clearly evident: “Local character” is thus no mere accidental old-world quaintness, as its mimics think and say. It is attained only in course of adequate grasp and treatment of the whole environment, and in active sympathy with the
- essential and characteristic life of the place concerned.” [3] Note: [1] Barash, David (2002). *Peace and Conflict*. Sage Publications. p. 547. ISBN 9780761925071./ [2] Geddes, Patrick (1915). *Cities in Evolution*. London: Williams./ [3] Geddes, Patrick (1915). *Cities in Evolution*. London: Williams. p. 397. なお、’*Wikipedia*’の註1に挙げられているデイヴィット・バラシユの著作全体を通してゲデイスの名は登場せず、五四七頁には次のように記載されている。“Social organizer Saul Alinsky coined a valuable phrase for would-be activists: “Think globally, act locally.””
- (3) Walter Stephen (intr. and ed.), *Think Global, Act Local* (Edinburgh: Luath Press, 2004): 116. 該市簡所の記述は、
 “Thus Geddes it was who coined the mantra “Think Global, Act Local” (in *Cities in Evolution* in 1915) - although most of us would have guessed it emerged from Rio about 1994.”
- (4) P・ゲデイス『進化する都市』の全文は、以下のサイトに公開されている。“< http://openlibrary.org/works/OL63680W/Cities_in_evolution>”
- (5) Patrick Geddes, “The Influence of Geographical Conditions on Social Development,” *The Geographical Journal*, 12(1898), p. 581.
- (6) R・F・ナッシュ『アメリカの環境主義―環境思想の歴史』

- 史的アンソロジー』(同友館、二〇〇四年)、七七—八三頁。
- (7) Volker M. Welter, *Biopolis: Patrick Geddes and the City of Life* (Cambridge: MIT Press, 2002), pp. 177-179.
- (8) 大谷裕文編『文化のグロウカリゼーションを読み解く』(弦書房、二〇〇八年)、六一—七頁。
- (9) 註8 大谷、二〇—二二頁。
- (10) ゲデス『進化する都市』、西村一郎訳(鹿島出版会、一九八二年)、三四—三頁。原文は一九九七年刊行のルートリッジ版を参照した。Patrick Geddes, *Cities in Evolution* (London: Routledge, 1997): 397.
- (11) 註10 ゲデス、三四—三四二頁。
- (12) 註10 ゲデス、三四—三頁。Geddes, p. 396.
- (13) 註10 ゲデス、三四〇—三四二頁。
- (14) 註10 ゲデス、一九四頁。原文は以下の通り。"Learn from Germany? Certainly yes! Imitate Germany? Certainly no.", Geddes, p. 206.
- (15) 註10 ゲデス、一九八頁。
- (16) 註10 ゲデス、六二頁。Geddes, p. 43.
- (17) 同右。
- (18) 同右。
- (19) バーバラ・ウォード、ルネ・デュボス『かけがえのない地球—人類が生き残るための戦い』(日本総合出版機構、一九七二年)。Barbara Ward, René Dubos, *Only One Earth: the Care and Maintenance of a Small Planet* (New York: Norton, 1972).
- (20) 註2 *Wikipedia*。他にも、「フレッド・オブ・アース (Fred O E)」の創設者デヴィッド・ブロワー (David Brower)、『カナダの経済評論家フランク・フェザー (Frank Feather)』、『フランスの思想家ジャック・エリュール (Jacques Ellul)』、『米国の発明家バックミンスター・フララー (Buckminster Fuller)』、『米国の未来学者ヘイゼル・ヘンダーソン (Hazel Henderson)』、『社会運動家ソウル・アリンズキー (Saul Alinsky)』、『社会学者オイゲン・ローゼンシュトック=ヒュシー (Eugen Rosenstock-Huessy)』、『美術家オノ・ヨーコの名前が記されている(但し、オノは一九八一年のインタヴューで使用していることは確認されるが、考案者ではないとのこと)』。
- (21) 例えば、一般財団法人環境情報センターが運営するE ICネットの「環境Q & A」など。一六八〇番「用語の意味」<<http://www.eic.or.jp/qa/?act=view&serial=1680>> (2012/1/7)
- (22) 註19 ウォード+デュボス、二二頁。Ward and Dubos, p. xvii-xviii.
- (23) 註19 ウォード+デュボス、一八頁。Ward and Dubos, p.

- xv.
- (24) 註19 ウォード+デュボス、一四三頁。Ward and Dubos, p. 88.
- (25) 註19 ウォード+デュボス、二六頁。Ward and Dubos, p. 3.
- (26) 註19 ウォード+デュボス、六四頁。Ward and Dubos, p. 30.
- (27) 註19 ウォード+デュボス、三三三—三三四頁。Ward and Dubos, p. 217.
- (28) 註19 ウォード+デュボス、二二八頁。Ward and Dubos, p. 220.
- (29) ウォードとデュボスの共著『かけがえない地球』の思考の枠組みと、デュボス自身の思考の枠組みは、本論の「おわりに」で論じるように、区別が必要である。
- (30) *Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (1989), “global”: vol. VI, p. 582; “local”: vol. VIII, p. 1077.
- (31) Walter Stephen, “Think Global, Act Local – The Life and Legacy of Patrick Geddes” 註30 Stephen, p. 12.
- (32) Agenda 21, Section III: Strengthening the Role of Major Groups, Chapter 28: Local Authorities’ Initiatives in Support of Agenda 21 <http://www.un.org/csa/dsd/agenda21/res_agenda21_28.shtml> (2011/9/1)
- (33) 註30 Stephen, p. 13. ストナマン 註4 「Think Global, Act Local」の思想がリオ・サミットに体现されるまでに「二十年ないし三十年間をかけた「環境」運動による世論の高まり」が必要だったと指摘する。そうした世論の高まりを後押しした著作や刊行物として、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（一九六二年）、雑誌『エコロジスト』の特集号「生存のための青写真」（一九七二年一月）、E・F・シューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル』（一九七四年）の三冊を挙げ、これらの書物の刊行と地球サミットの開催によって一九七〇年前後と九〇年代初頭に「二つの山場」を想定する。他方、パトリック・ゲデイス卿記念財団の設立が一九七三年であり、ゲデイスに関する主要な伝記は一九七五年と七八年、そして九〇年に刊行されている。これらの「二つの山場」をステファンは「偶然の一致ではない」とするが、六〇年代の「環境革命」を重視する見地に立てば、厳密には「一致」とは見られず、ゲデイス再評価を画する財団の設立や伝記の刊行は環境運動の盛り上がり後の後を追うかたちになっている。
- (34) ジョン・マコーミック『地球環境運動全史』（岩波書店、一九九八年）、五頁。
- (35) 註34 マコーミック、八頁。Gilbert White, *The Natural History and Antiquities of Selborne* (1789).

- (36) 註 34 マコーミック、一〇頁。
- (37) 註 34 マコーミック、一一頁。
- (38) 註 34 マコーミック、一二頁。
- (39) 註 7 Welter, pp.9-11.
- (40) 註 34 マコーミック、二七―二八頁。
- (41) 註 34 マコーミック、三二―三三頁。
- (42) 註 34 マコーミック、三七―三九頁。刊行年には訂正を加えた。なお、各著作の原題等は以下の通り。Paul B. Sears, *Deserts on March* (Norman: U of Oklahoma P, 1935); Frank Pearson and Floyd Harper, *World's Hunger* (New York: Cornell UP, 1945); Fairfield Osborn, *Our Plundered Planet* (New York: Grosset & Dunlap, 1948); Fairfield Osborn, *The Limits of the Earth* (Boston: Little, Brown, 1953); William Vogt, *Road to Survival* (New York: W. Sloane Associates, 1948)。(ウイリアム・ヴォート『生き残る道』、トッパン、一九五〇年)。
- (43) 註 34 マコーミック、三九頁。
- (44) 註 34 マコーミック、五五、六四―六七頁。
- (45) 註 34 マコーミック、六四―六五頁。マコーミックは『雑誌『エンバイロメント』(一九七三年)掲載のケヴィン・シアの書評を引用してゐる。Kevin Shea, "A Celebration of Silent Spring," *Environment* 15: 1, Jan.-Feb. 1973: 3-5.
- (46) 註 34 マコーミック、六〇頁。
- (47) 註 34 マコーミック、五五頁。
- (48) 註 34 マコーミック、八八―九二頁。
- (49) 註 31 Stephen, p. 11.
- (50) 註 19 ウォード+デュボス、二二頁。
- (51) 註 19 Ward and Dubos, p. xviii.
- (52) R・デュボス『内なる神』、長野敬ほか訳(蒼樹書房、一九七四年)。
- (53) 註 52 デュボス、一三頁。
- (54) 註 52 デュボス、一七頁。
- (55) 註 52 デュボス、一頁。
- (56) 註 52 デュボス、一〇―一頁。
- (57) 註 52 デュボス、一〇九頁。
- (58) 『リク・ヴェーダ讃歌』、辻直四郎訳(岩波書店、一九七〇年)、二二七頁。